筑紫女学園大学リポジト

The Writings of Shu-Eki (II)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-02-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 永淵, 道彦, NAGAFUCHI, Michihiko メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/732

周易覚書（二）

――続・占筮易断の基礎知識について――

永淵道彦

The Writings of Shu-Eki〔II〕

Michihiko NAGAFUCHI

はじめに

本稿では前稿に引き続き、占筮易断の基礎知識として「連想と暗示」「偶然・必然・こじつけ」について考察していきたい。占筮易断の基礎知識として避けて通れない事柄だからである。

言わずもがなの確認であるが、周易の根本であり、根幹を成すものは卦形である。もし卦形が無ければ、卦名も卦辞・爻辞も、そして諸伝である十翼も無意味である。そこで、「連想と暗示」について、「繫辞伝」「説卦伝」等の十翼を参考にしながら、周易の根幹である卦形をめぐって考えをめぐらすことにしたい。

また、「偶然・必然・こじつけ」は占筮易断につきまとう問題である。これについても併せて一考しておくことにする。

一、連想と暗示

周易の卦形における連想と暗示について考えをめぐらすにあたり、まず、周易の卦形と漢字の字形とを比較することからはじめてみよう。周易の卦形は古代の言葉であり、周易は卦形による字書であるとも捉えらることができるからである。

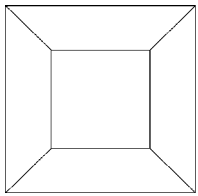
周易の卦形も漢字の字形も記号であることに変わりはないが、大いなる違いを指摘できる。漢字が今に至るまで象形の跡を止めているのに対し、卦形は早くから抽象化されて純然たる記号となっている。すなわち、卦形が純然たる記号であるということはどのような意味にでも解釈することができるということである。そのうえ、六十四という数（＝六十四卦）に限定されている以上、表意文字としても実用することが、漢字と違い、ほとんど出来ないということでもある。

またそのうえ、卦形は表音文字にもなり得ない記号である。抽象形でありながら、各卦独立してそれぞれの意味を失わないからである。それは、独立した各卦の意味、すなわち卦形の象徴性が陰・陽の象徴的思考による各爻に支えられていることによる。

要するに、古代の言葉であるとも捉えられる周易の卦形は、このように占筮用に考案された特異な形であるということである。

極端な言い方をすれば、卦形さえあれば自己暗示により、そして連想によって占筮はできるということである。易筮だけでなく一般に占いとはそうしたものであるが、周易における卦形は実に巧みに作られた特異な記号なのである。

だまし絵というものがある。上図はその最も簡単な一例であるが、中央の小さい正方形は、手前に張り出していると思えばそう見え、奥に沈んでいると思えばそう見える。何かの箱を上から覗いた形とも見え、箱の底を見たようにも思える。自己暗示と連想次第である。



周易の卦形の素は━と┅とであるが、なぜ━が陽を表し、┅が陰を示すのかについては、諸説があって明らかではない。上古においては、━は○と記され、天の円形を象徴したという説があるが、━と┅とは男女の性器を表したものであるという説もある。いづれにしろ、そう言われればそう見えてくるから、暗示や連想というものは妙なものと言わねばならない。

このような天空の見え方や人間の身体といった、数千年くらいの時間ではそれほど変化するものでない、不変のものに根を下ろした自由な暗示やそれによる連想こそ、われわれ現代人にも通じるものであり、また周易における卦形への有効な暗示と連想でもあると言わねばならない。

× × × × ×

では、具体的に中国古代において、八卦の卦形における暗示と連想がどのようなものであったかを検討していきたいが、「乾・坤」の性情について述べた「繫辞伝」の一節を、まず掲げてみたい。ここに暗示されるのは天地のことであろうか、或いは男女のことであろうか、各自の自由な連想に任せたい。

「夫れ乾はその静かなるや専らにして、その動くや直し。ここをもって大いに生ず。夫れ坤はその静かなるや翕い。その動くや開く。ここをもって広く生ず」。

（基本である乾坤のはたらきに即して言えば、そもそも乾はその陽気がいまだ発動せず静止の状態にある時は専一不二であるが、ひとたび発動すれば直遂不撓――まっしぐらで撓み屈することがない。なればこそ大いに物を生じ得るのである。また坤はその陰気がまだ発動せず静止の状態にある時はぴたりと閉じあわさっているが、ひとたび

発動すれば陽気の施しを受けて開放発散する。なればこそ広く物を生ずることを得るのである。）

〔高田真治・後藤基巳訳より〕

八卦の卦形についても、古代人はこのような連想を占筮に用いただけでなく、連想ゲーム的に楽しんだようである。卦形の抽象形から古代人らはどんな具体物を八卦に連想したか、その例を「説卦伝」に見ることができる。その多様さに驚くばかりであるが、当然のことながら、現代人にはその意味を捉えにくいものも多い。

「乾を天と為し、圜と為し、君と為し、父と為し、玉と為し、金と為し、寒と為し、冰と為し、大赤と為し、良馬と為し、老馬と為し、瘠馬と為し、駁馬と為し、木果と為す。

坤を地と為し、母と為し、布と為し、釜と為し、吝嗇と為し、均と為し、子母牛と為し、大輿と為し、文と為し、衆と為し、柄と為し、その地におけるや黒と為す。

震を雷と為し、竜と為し、玄黄と為し、旉と為し、大塗と為し、長子と為し、決躁と為し、蒼筤竹と為し、萑葦と為し、その馬におけるや善鳴と為し、馵足と為し、作足と為し、的顙と為し、その稼におけるや反生と為し、それ究まりては健と為し、蕃鮮と為す。

巽を木と為し、風と為し、長女と為し、繩直と為し、工と為し、白と為し、長と為し、高と為し、進退と為し、果ならずと為し、臭と為し、その人におけるや寡髪と為し、広顙と為し、白眼多しと為し、利に近づき市って三倍すと為し、それ究まりては躁の卦と為す。

坎を水と為し、溝瀆と為し、隠伏と為し、矯輮と為し、弓輪と為し、その人におけるや加憂と為し、心病と為し、耳痛と為し、血の卦と為し、赤と為し、その馬におけるや美脊と為し、亟心と為し、下首と為し、薄蹄と為し、曳くと為し、その輿におけるや眚多しと為し、通ずと為し、月と為し、盗と為し、その木におけるや堅くして心多しと為す。

離を火と為し、日と為し、電と為し、中女と為し、甲冑と為し、戈兵と為し、その人におけるや大腹と為し、乾くの卦と為し、鱉と為し、蟹と為し、蠃と為し、蚌と為し、亀と為し、その木におけるや科にして上槁と為す。艮を山と為し、径路と為し、小石と為し、門闕と為し、果蓏と為し、閽寺と為し、指と為し、狗と為し、鼠と為し、黔喙の属と為し、その木におけるや堅くして節多しと為す。

兌を沢と為し、少女と為し、巫と為し、口舌と為し、毀折と為し、附決と為し、その地におけるや剛鹵と為し、妾と為し、羊と為す。」

（「説卦伝」）

（八卦をもろもろの事象に当てて言えば次のようになる。／乾は天であり、その属性からすれば圜〔円〕であり、人間として言えば君であり父であり、純剛の物という点では玉であり金であり、西北寒冷の方角に配される卦だから寒であり冰であり、純陽の色という点では大赤〔真っ赤〕であり、馬のすぐれたものという点では、良馬であり老馬であり脊骨が高くて良く走る痩せ馬であり、鋸のような牙があって虎や豹をも食べるという駁馬であり、生気の充実した姿という点では木の果である。

坤は地であり、母であり、広くたいらで物を載せるという点では布であり、物を容れて成熟させるという点では釜であり、包蔵した物を外に出さないという点では吝嗇であり、わけへだてなく物を養うという点では均〔平均・平等〕であり、柔順でよく子を生むという点では子母牛〔子持ち牛〕であり、あらゆる物を載せ得るという点では大きな輿であり、生みなす物の多彩多様という点では文〔文章模様〕であり衆であり、物の大本という点では柄であり、地の色としては最も純粋な黒である。

震は雷であり、竜であり、色で言えば玄黄〔玄＝黒と黄の雑った色が玄黄、玄は天の色、黄は地の色、従って玄黄は天地の雑色、震は天地＝乾坤が始めて交って生じた卦である〕であり、陽気が始めて発する春という点にかけていえば舅〔花の総称〕であり、その陽気がつつがなく進行するという点では大塗〔大きな道路〕であり、家族関

係では長子、動くという卦徳に関連しては決躁〔思いきりよくあわただしいこと〕であり、植物に当てれば蒼筤竹〔青青と葉の茂った竹〕・萑葦〔荻と葦〕であり、馬に当てればいななく声の善い馬・馵足〔後足の白い馬〕・作足〔足なみの速い馬〕・的顙〔額の白い馬〕であり、稼〔栽培する植物〕では反生〔いちど出た芽がさかさに土へ根をおろしてから葉をのばす豆麻の類〕、動きを極めるという点では健であり、蕃鮮〔繁茂・鮮明・草木が繁って色の鮮やかなこと〕である。

巽は木であり、風であり、長女であり、木の曲りを正すという意味では繩直〔墨繩を正しくあてること〕であり、その仕事を果たす大工であり、一陰始めて生じて柔弱という点で色にあてれば白、風が遠くまで吹き渡るということからすれば長い、木がどんどん成長するということからすれば高いの意味であり、風向きが前後に変るという点からは進退〔進んだり退いたり〕・果断でないという意味になり、風が臭いをはこぶという点からは臭い、風が木の葉を吹き落すということ、また白色ということから、人間では髪の毛の薄くなった人、額の禿げあがって広い人、白眼の部分の多い人にあたり、風の躁急さと関連させて、金儲けに精を出し物を原価の三倍に売る人の意味となり、究極的にはすべて躁〔躁急・さわがしい・あわただしいこと〕を意味する卦である。

坎は水であり、溝瀆〔水を流すみぞ・どぶ〕であり、隠伏〔地下水〕であり、水の柔軟性にちなんで矯輮〔物を矯め曲げること〕であり、その実例として弓・車輪であり、坎＝険難ということにちなんで人に当てれば加憂〔気苦労の重なった人〕・心病〔心の病い〕・耳痛であり、人体中の水に相当するという点では血の卦であり、その色にちなんで赤であり、馬に当てれば背中の美しい馬・亟心〔心のせわしい馬〕・下り首の馬、蹄の擦りへって薄くなった馬、疲れて足を曳きずる馬であり、輿でいえば災厄の多い車であり、水にちなんでは通ずるの意味、水の精である月、ひそかに忍びこむ盗人であり、木では堅くて芯の多いものである。

離は火であり、日〔太陽〕であり、電〔稲妻〕であり、中女〔二番目の娘〕であり、卦象が☲で剛爻が外を蔽い

中が空虚であるところから、堅くて身を守る戈兵〔ほこ・武器〕であり、人間では出っ腹の人であり、火や日のはたらきにちなんで乾く・乾燥を意味する卦であり、動物では堅い殻で身を蔽っている鱉〔すっぽん〕・蟹・蠃〔たにし〕・蚌〔はまぐり〕・亀であり、木で言えば幹が科になり上の方が枯れかかった木である。

艮は山であり、山にちなんで径路・小石であり、卦象の☶にちなんで門闕〔宮城の門、上に楼観＝物見の台があり、中央がくぐり抜けられる〕であり、卦徳の止むにちなんで草木の止め〔最後〕の状態たる果〔木の実〕・蓏〔草の実〕であり、人を止める役の閽〔門番〕・寺〔寺人・宮中の宦官〕であり、物を推し止める指であり、動物では牙の鋭い狗・鼠・黔喙〔黒いくちばし・虎や豹などの猛獣〕の類であり、木で言えば堅くて節の多い木である。

兌は沢であり、少女〔末の娘〕であり、兌は口であることにちなんで、神託を告げる巫〔みこ〕であり、物をしゃべる口舌であり、植物の現象としては毀折〔茎などがぽっきり折れること〕・附決〔枝についていた実がぽたりと落ちること〕を言い、土地でいえば剛鹵〔アルカリ性の強い硬い土質、沢の涸れたあとの状態〕であり、少女ということにちなんでいえば、嫡妻たる姉娘に附いて嫁ぐ娣妾〔わきよめ〕であり、動物では従順で人になつく羊である。〔高田真治・後藤基巳訳より〕

おそらく多くの人々の様々な場合における連想を、一人の占筮家が記録したものでなかろうかと考えられる。アンケートによる結果をありのままに記録したという趣さえ感じられるからである。中には、後世のものの混入かと思われる、例えば進退のような関係概念も認められるが、多くは素朴で具体的な、古代の大衆の生活感情のにじんだイメージである。動物では、農耕に欠かせない馬が最も多く、牛・羊・狗などの家畜、身近に生息している鼠などの姿が連想されている。

人に関するイメージでは、当時の社会構造を反映して男性中心である。寡髪〔少ない頭髪〕や多白眼などの見立て連想には、陽気な笑いが伴っていたであろうし、加憂や心病などから、古代にもノイローゼやストレスがあった

と察せられる。もちろん耳痛もあったのである。ただし、古代人は現代人よりずっと素直に自分の感情に従って、泣いたり笑ったり、行動を起こしたりしたようである。それは六十四卦の卦辞や爻辞によく表れている。

玄黄は大陸における大地の色であるが、白・黒・赤などの原色が多いのは、玄黄なる大地の上に生活する民族の好みとして当然であって、現代でも服装の好みなどに影響を与えていると言えよう。

とは言え、以上のような「説卦伝」に見ることができる卦形の抽象形への中国古代人による連想は繰り返しになるが、われわれ現代人にとって甚だ捉えにくい。そこで、八卦の卦形への連想について、現代のわれわれに即した私見を以下に述べておくことにしよう。

・乾（☰）は独立的で純粋な形であり、健全な運行を象徴する。
・坤（☷）も独立的で純粋である点では乾と同じではあるが、乾の剛健と表裏をなす形で、受け身の従順さを示している。

なお、乾は純粋に陽性（⚊）を表し、坤は純粋に陰性（⚋）を示している。その点でこの二卦は他の六卦に対し基本の形とされる。他の六卦では、⚊（陽性）と⚋（陰性）とによる連想の他に、その卦形による連想が多少なり混入している。これは六十四卦においては更に甚だしくまた複雑になっている。

・震（☳）は軟らかい地中（☵）の動き（⚊）を表すので、地震を連想させるが、それは筆者が地震国日本の住人であるからかもしれない。
・巽（☴）は、重苦しい壁（☶）の底からそよりと忍んで入る微風（⚋）を感じさせる。中国天津に筆者は生まれたが、この地では夏、昼間は窓を固く閉ざして熱風の侵入を防ぎ、早朝未明にだけ開放して冷気を入れることなどを想起させられる。
・坎（☵）はまさに陥没の形である。一陽を男性、二陰を女性に見立てて「両手に花」と解する現代人がいるかも

しれないが、苦労人の占筮家は、それこそ危険な陥没であると警告すると考えたい。

・離（☲）は、「麗く」ことであって、何かに付着して目立つ意味を持つ。目立ちたければ、自分を目立たせる何かに付着していなければならない。一人の女性（☲）が二人の男性（☲）に囲まれて「紅一点」の形となるのである。

また、形による連想から☵（坎）は水の象で下降性を持ち、☲（離）は火の象で上昇性を持つとも説かれている。☶の形から現代人が嬲という字形を連想するのは勝手であるが、火の象徴であることは忘れてはならない。

・艮（☶）は、上位の一陽が山のように二陰の進行を妨げている形である。なお、「山に突き当ったら戻れ」という自然に随順する考えは、老子（中国戦国時代の哲学者）の無為自然を尊ぶ思想を連想させる。

・兌（☱）は悦ぶ意味である。高地（☶）に沢（☱）を見つけた嬉しさであろう。沢のほとりは、人間ばかりでなく多くの動植物に生きる利便を与える。砂漠でオアシスを見つけた喜びと同じである。

× × × × ×

また、「説卦伝」には、掲げた一文に先立って次のような記述がある。成立の順序を考えれば、掲げた一文の方が先で、これを整理し抽出したものではなかろうかと思われる。

「乾は健なり。坤は順なり。震は動なり。巽は入なり。坎は陥なり。離は麗なり。艮は止なり。兌は説なり。」

（八卦の卦徳すなわちその働きについて言えば、乾は運行して息むことのない天にのっとるから健か、坤は地で、素直に天のはたらきを受けつぐから、順う、震は一陽がはじめて下に生じはじめた象であるから、動く、巽は一陰が二陽の下にへり下って相手の心中に入りこむから、入る、坎は一陽が二陰のあいだに陥没している象だから、陥る、離は一陰が二陽のあいだにとりついている象だから、麗く、艮は上の陽が二陰の進むのをおしとどめる象だから、止む、兌は一陰が二陽を悦ばす象だから、説ぶである。）

〔高田真治・後藤基巳訳より〕

ここでは、八卦の卦形を性情としてまとめている。ちなみに、麗(り)は「つく」意味でものに付着することであり、説は悦(よろこ)ぶの意味である。

「乾を首と為し、坤を腹と為し、震を足と為し、巽を股と為し、坎を耳と為し、離を目と為し、艮を手と為し、兌を口と為す。」

（同前）

（八卦を人の身体の部分に当てて言えば、乾は上に在って尊いから頭、坤は物を包蔵するから腹、震は動く、だから足、巽は人に巽(したが)う、だから足に従って動く股、坎は穴、だから耳、離は明らか、だから目、艮は止める、だから物を止める手、兌は説んで笑うというところから口である。）

〔高田真治・後藤基巳訳より〕

このように「説卦伝」には八卦を身体の部分に見立てている一文もあるが、また、八卦の成立を家族関係にたとえて説いた、次のような有名な一文も出てくる。

「乾は天なり、故に父と称す。坤は地なり、故に母と称す。震は一索して男を得、故にこれを長男と謂う。巽は一索して女を得、故にこれを長女と謂う。坎は再索して男を得、故にこれを中男と謂う。離は再索して女を得、故にこれを中女と謂う。艮は三索して男を得、故にこれを少男と謂う。兌は三索して女を得、故にこれを少女と謂う。」

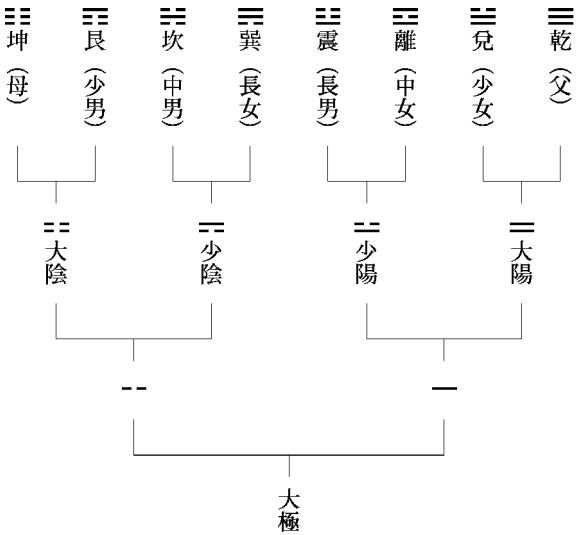
（同前）

（八卦を家族の成員に当てて言えば、乾は天だから父と呼ばれ、坤は地だから母と呼ばれる。震は母なる坤☷から父なる乾☰に一索（ひとたび索めるの意）してその初画の陽を得た陽卦つまり最初の男子であるからこれを長男と謂う。同様に巽は乾から坤に一索して得た最初の女子であるからこれを長女と謂う。坎はふたたび索めて得た男子だから中男、離はふたたび索めて得た女子だから中女、艮は三たび索めて得た男子だから少男、兌は三たび索めて得た女子だから少女と謂うのである。）

〔高田真治・後藤基巳訳より〕

これは「乾坤六子の説」として後世の易書に多く載せられている。八卦はこのようにして成立したという説であ

るが、信ずるに足りない。八卦の成立については他にも異説が多いが、宋代に至って朱子の一派が「加一法」を説き、この「乾坤六子の説」を採り入れている。



少女が最も父に親しみやすく、少男が最も母に親しみやすいなど、現代にも通じる家庭内の人情の構図であって、連想の遊びとしては面白いが、要するにそれ以上の意味をつけ加えるのは無理であろう。むしろ先に掲げた、性情による「説卦伝」の連想の一文の方が興味深く、六十四卦の卦辞・爻辞を読み解くためにも役立つことが多いと言

える。

×　×　×　×　×

さて、八卦おける卦形の暗示と連想に続けて、六十四卦についても触れていきたいが、その全てを取り上げることは煩雑であり、八卦における連想と類似する。そこで多くを割愛し、代表的な例をいくつか取り上げて述べるに止めたい。

・鼎卦について。その形（䷱）が、王朝を象徴する神器の鼎の形と類似していることは広く知られている。このように六十四卦には、卦形から連想される事物の形状や性情によって卦名がつけられている例は多い。

・頤卦（䷚）について。卦名の頤は「あご」であり、卦形は口（上九と初九の二陽）を大きく開けて食物（中爻の四陰）をほうばっている形である。陰陽の象徴を別にしても、その気になればそういう形に見える。だがやはり、―（陽）が堅いあご骨や歯を連想させ、‐‐（陰）が軟らかい羊肉などの連想を誘うという、陰陽の暗示作用を無視するわけにはいかない。連想は連想を呼ぶことになる。六四の陰が変じて、陽となればどのようになるであろうか。

・噬嗑卦（䷔）について。卦名の噬嗑は歯で堅い物を噛むことであるが、上記の頤の卦形と比べてその形は、軟らかい羊肉の中に固い骨（九四の陽爻）が入っていて、これを歯で噛み砕く連想となる。また、両卦の卦辞を比較すると、頤卦では養生のことを述べているのに対し、噬嗑卦においては刑罰へとその連想は伸びている。

・節卦（䷻）について。この卦形から竹の節を連想するのはいささか無理とも思われるが、その気になればそう見えないこともない。中国では古代から竹は多かったらしく、その形状から正義の人にたとえられ、節義・節操などの熟語を生んでいる。節卦の卦辞も節義の意義を説いている。

なお、筮という漢字でもわかるように、竹は占筮に縁の深い植物で、占筮家がこの卦形を見て竹を連想したのは、

その点から考えれば自然であったであろう。

・中孚卦（䷼）について。孚とは信という意味であるが、その卦辞には「中孚は、豚魚にして吉なり」（心中に孚誠〔まこと〕があれば、無知の豚魚〔ふぐ〕でさえもこれに感応して吉である＝高田真治・後藤基巳訳より）とあり、彖伝には「中孚は、柔、内に在りて剛、中を得たり。説びて巽い、ありてすなわち邦を化するなり。豚魚にして吉なりとは、信豚魚に及ぶなり」（中孚は、柔〔三・四〕が卦の内側に在り、剛〔二・五〕が中位を得た象である。下の者が説び〔兌〕上の者が謙遜〔巽〕で、孚誠により邦国を感化することである。豚魚にして吉なりというのは、その誠信が豚魚にまで及ぶことである。＝同前）と解説している。

「柔、内に在りて」というのは、六四と六三の二陰が中央に位置していることを指し、「剛、中を得たり」というのは九五と九二の二陽が、それぞれ上体と下体との中位に在ることを言う。「説びて巽い」とは、中正の位の九五の一陽の信用を得て悦び（兌）、これに従う（巽）という意味で、女性が男性の信愛を得て悦び従うことを暗示している。豚・魚は無神経・無感覚の動物を例として、信の力の偉大さを「信、豚魚に及ぶなり」と言ったのであろう。現代人には思いつきそうもない連想である。

ところで、この中孚は、上体が風（巽）で下体が沢（兌）であって風沢中孚（ふうたくちゅうふ）と称されるが、これを幸田露伴が面白くしやれ、しかもこの卦の意味を連想によって巧みに捉えている例がある。

昭和初期のある雑誌上の対談記事（注＝未詳、谷崎潤一郎との対談）だったと記憶するが、博学の老作家幸田露伴はこの卦について、「ふうたり（二人）チュー」と言っていたからである。周易に通じた面白い蘊蓄あるしゃれと言えないであろうか。

周易の原作者は聖人などではなく、「憂い顔の哲学者」（易を作る者は、それ憂患あるか〔易の作者は心に憂患を抱く人であったのであろうか〕「繫辞伝」＝高田真治・後藤基巳訳より）であると推測される。しばし世渡りの憂さ

を忘れ、自由な連想を楽しみながら一つ一つの卦形に命名している古代中国の哲学者の姿を想像することは、人生の実相であり、周易卦形に対する暗示と連想に相応しいと言えよう。また、煩雑さを避け、上記のように六十四卦の代表的ないくつかを取り上げるに止まったが、自由な暗示と連想は、卦形に対する参考にすべき視座でないであろうか。

二、偶然・必然・こじつけ

卦形における連想と暗示に続けて、易断占筮においてはやはり、偶然、必然、こじつけということを見過ごすわけにいかないであろう。占筮には偶然、必然、こじつけということが付きまとうからである。では具体的に考えていくことにしよう。

一個のりんごの落下によって、科学者ニュートンが万有引力の法則を発見したことは有名な話である。ニュートンは当時、無名の一学徒にすぎなかったという。先輩教授の不当な圧力に耐えかね、ニュートンは科学者への道を半ば断念し郷里の農園に帰省していた。あくまで科学者への道をすすむべきか、一農夫として一生を田園に埋めるべきか、思い悩みながら農道を歩いていた折り、万有引力の法則を発見するきっかけとなる一個のりんごが、彼の眼前に落ちてきたという。

ニュートンとりんごとの出遇いは必然でなく、全くの偶然であった。だが、その出遇いに先立つ長年の科学研究は決して偶然とは言えない。また、彼が万有引力の説を世間に発表したのはその数年の後であるという事実も忘れてはならない。

占筮して一卦を得ても、それは必然でなく、偶然の出遇いにすぎないと言える。そこに遊びを認めて楽しむに止

まるか、悩みの解決を見出すかは、その人の悩みの深さと日頃の努力とによるものであろう。そこに必然と称すべきものが出来（しゅったい）すると言える。

千回もくり返して占筮すれば、そこに確率という必然の数理が作用するだろうという理屈もあろう。だが、それでは何のために占筮したのかわけが分からなくなり、そのような必然は無意味であることは一言しておきたい。

ところで、日常生活において、われわれは記号と象徴とを使い分けて暮らしている。記号は知るものであり、象徴は感じるものである。例えば、交通信号は青であると知っても、前方から猛進してくる車に危険を感じれば止まってこれを避けるといった具合である。

周易の卦形は記号であって、これを知るのは易い。だが、卦形が内包する陰陽の象徴は千変万化の動きを示して、これを感じ取るのは難しい。交通信号も象徴を内包している記号だが、例えば赤は危険の象徴という意味に限定されていて、情熱などは象徴しないように規定されている。だが、卦形はもっと複雑多様な象徴を内包している。興味深い象徴的記号と言わねばならない。

科学の進歩、技術の発達は結構なことであるが、日常生活が機械化記号化する余り、人の心を知る働きばかりが促進され、感じる機能は低下してしまうのではなかろうか。

煙草屋の看板娘が姿を消し、代わりに自動販売機が据えつけられる。それに似た風景が、役所にも銀行にも、病院にも見られる。それが学校や家庭における対人関係にまで及び、人の感情はとげとげしくなり、心のゆとりを失って行く。これでいいのかと周易は現代人に感じることの重要さを問いかけているとも言える。

機械的な記号の束縛から逃れようと、或いは新興宗教や星占いに救いを求め、推理小説やマンガに心の安らぎを求める。それも悪いことではないが、困るのは「こじつけ」の混入である。偶然の出遇いを楽しむ人の心につけこんで、それがいかにも必然の理に基づいているように見せかけることである。周易にあっても、その諸伝（解説）

である十翼にもこじつけの混入の跡が見られる。

こじつけは「故事つけ」であって、有名な故事などを引用して自分の説を権威づけようとすることであるが、巧みに用いられると、どこまでが必然でどこまでが偶然なのか、見分けがつかない場合が多い。

ライプニッツは、陰陽の説を聞いて陰は〇、陽は1であると解釈し、この二つですべての数を表すことができると喜んだという。これは、彼が自分の数理における考え方と同じ傾向の思考法を周易に見出したのであるから、こじつけとは言えない。しかし、もし一歩進んで「易書は数理を述べた書である」と言ったとすれば、それこそこじつけであり、弊害が生ずることになる。

日本語の発声が二音節で切れ易いことを利用した言葉遊びがある。落語家（はなしか）が自分たちのことを「しか」と言ったり、少しぼんやりしている人を捕まえて、「さかなや（魚屋）のナヤという字を知っているか」と言ってからかうのがその例で、それが言葉遊びに止まる限り、罪のない遊びであるばかりでなく、日本語を味あう点で有益であるが、次の例はどうであろうか。

ある新興宗教家の話の中だったと記憶するが、「働くというのはハタの者をラク（楽）にすることである」と言っていた。ハタの者を楽にするために働くのはいいことだが、日本語の文法を故意にまげた困った言い方であり、前の例とは微妙な違いがある。

これも言葉遊びの一種であるが、桜という漢字は古くは櫻と書いたので、「二階（貝）の女が気（木）にかかる」などと言って、漢字の暗記の一助にして楽しんだものである。ところが、ある高校で、生徒達に対する実業家の講演を傍聴した折りのことである。その講師は努力の大切さを説いて「努力の努の字は、女が又（股）に力を入れる意味で、女の出産の時の努力は男の想像の及ばないところです」と言っていた。驚きあきれてしまったが、理由は説明するまでもあるまい。

以上のように偶然、必然、こじつけについて考えをめぐらしてきたが、易断占筮においては、卦形に対する連想と暗示だけでなく、これらについての見分けも重々、留意しておかなければならないということである。

〔付記〕本稿の周易における引用や訳については、高田真治・後藤基巳訳『易経上』『易経下』（ワイド版・岩波文庫　一九九三年八月）に拠った。